

郷土摂津

第83号

平成17年3月1日

いにしえ通信

発行 摂津市教育委員会 生涯学習部 生涯学習課
〒566 - 8555 摂津市三島一丁目1 - 1

(06)6383 - 1111 (072)638 - 0007

ホームページアドレス <http://www.city.settsu.osaka.jp/>摂津市の
石造文化財摂津市域の
お地蔵さん

第12回

地蔵菩薩とは 幼い頃の夏の思い出の一つに「地蔵盆」があります。当日は子供が主役になれる祭りで、子供の目から見たお地蔵さんは、まさに仏さんのように思えたものです。

また、日頃からつらい事、や苦しい事、また悲しい事などお地蔵さんをお願いすれば救ってくださるといふ、生活に密着した根強い信仰が今でも残っています。

地蔵菩薩は石仏としてもっとも普遍的に造立されたものです。釈迦入滅から56億7000万年を経て、弥勒菩薩が如来となって娑婆世界に現われ、衆生を救済するまでの間、信仰を寄せる者を浄土へと導く役割をになう菩薩です。地蔵菩薩は路傍や寺院・墓地の入り口などに見られる事が多く、後者は六地蔵の姿で安置されることが多く見られます。地獄・畜生・餓鬼・修羅・人・天の六道輪廻の考え方は、石造物の遺例から室町時代の頃にはすでに庶民層まで広がっていたようです。近世以後も、身近で最も親しみ深い地蔵菩薩はお地蔵さんとして敬われ、「地蔵講」「地蔵盆」など生活に深く結びついた信仰として、今日に至ったものと考えられます。

摂津市域のお地蔵さん 平成14年5月、摂津市文化財愛護会から『摂津市域のお地蔵さん』という冊子が刊行されました。この冊子は平成12～13年度にかけて実態調査・分布調査を実施し、市内のお地蔵さんの位置や写真をおさめた本格的な調査で良好な資料となりました。また管理者や供養者から、お地蔵さんの由来や歴史も聞き取り調査もされています。まさに市民による埋もれがちな石造文化財を掘り起こす作業でした。この冊子について残部が少々ですが、摂津市教育委員会生涯学習課にあります。興味のある方はお問い合わせください。

市内を鳥飼地区・三宅地区など5地区に分けて56ヶ所の地蔵・地蔵堂について掲載しています。

残部少につきお問合せはお早め⇒



市内のお地蔵さん
(浜町7-24)
『摂津市域のお地蔵さん』より
(原文のまま)



浜町の地蔵尊は明治のころに行われた安威川の改修工事の折に発見されたやや位の高い地蔵尊といわれている。当時のほころは現在地から北よりの地にあつたが、昭和48年ごろに現在地に移る。そして移転をきっかけに浜地区の地蔵尊と位置づけられた。つまり15軒で構成する「垣内」を5軒ずつ、3年交替とし、なお1年を5人で割るという仕組みが作られた。現在もこの取決めに基づいて地蔵尊の管理（お水やお花のお供え・ほころ内外の清掃また修復など）や運営（会計・行事など）がなされているとのこと。

新連載のお知らせ

ふるさとの川「淀川」

～川は流れる悠久の歴史の中で～

平成10年5月より刊行しております本通信もおかげさまで5年目を迎えます。そこで次号より装いを新たに新連載をスタートします。タイトルは『ふるさとの川「淀川」』。人類が出現する以前の原始・古代・中近世から現代まで時代別に淀川と摂津市の関わりに迫ります。

石碑・顕彰札の紹介

摂津市域の歴史をたずねて

【所在地】摂津市鳥飼下堤防上

【設置年度】昭和49年10月建立

千本つきの歌碑 淀川の右岸に位置する摂津市は、いにしえより河川の氾濫がくりかえされてきました。それは堤防を築くことの戦いとも言えます。明治18年の洪水を契機として、堤防工事が施工されます。当時の堤防工事は過酷なものであったろうと伺えます。沿岸の農民たちは労働者として工事に参加し、主に男性はトロッコ押し、女性は千本つきといった作業を受け持ちました。千本つきというのは一種の地固め作業で長さ1m半ぐらいに棹をもって土砂をおいたばかりの堤防上に並び、棹をおろしてつき固めていく仕事です。

淀川には明治以前の渡しがあり、昭和50年の改修工事で休航となります。また河岸にあった「宗慶島」という中洲も大正10年に土砂利用のため姿を消しました。淀川河川改修は、今でも終わることなく続けられているのです。またこの歌は文化連盟加盟団体「民謡連合会」により唄い継がれています。

(正面) 千本つきの歌
千本つきには
調子ござる
足と手と口 三拍子

(裏面) 淀川百年記念
題字 長野弘子書
前田恵子書
九頭竜川産石
昭和四十九年十月建立



石碑写真

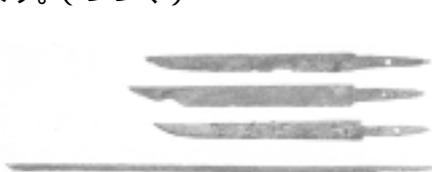
石碑から仁和寺大橋を望む

石碑に刻まれた文章

第46回 埋もれた摂津市の歴史

淀川から土器が出土・柱本遺跡の調査

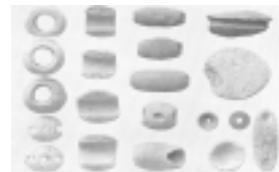
柱本遺跡は淀川河川敷に位置します。周辺地は現在では陸地化していますが、古代はいかなる景観だったのでしょうか。縄文時代の前期(約7000~6000年前)になると縄文海進といわれる急激な海面上昇が見られます。この時期は市域のほとんどが海の底で、千里丘付近が海岸線だったようです。しかし縄文時代中頃(約5000~4000年前)になると河内湾は河川が運んでくる泥や砂によって埋まっていきます。河口には三角州が著しく発達し、この時期に市域の大部分が陸地化していきます。やがて河内湾の入り口に砂がたまり陸地がのび(天満砂堆、吹田砂堆)、海の水が入りにくくなり湾は潟となり、さらに湖へと変化していきます。淀川が運ぶ土砂の沖積作用によって陸地部分が拡大していきます。また平野部の自然堤防(洪水のときあふれた土砂で形成される微高地)など小高い場所が広がります。このように縄文時代中頃以降、淀川周辺でも人々が生活できる環境が整ってくるのです。柱本遺跡では縄文土器の出土が見られ、このような淀川自然堤防上の集落である可能性を残します。(つづく)



鉄刀



近世磁器



土錘・石錘・貨幣